じゃりみち

…仮設支援情報…

第32号　　発行日　1996.　12.19
阪神・淡路大震災
「仮設」支援ＮＧＯ連絡会
〒653　神戸市長田区御蔵通5-5
TEL：078-578-6921 / FAX: 078-578-6923
E-mail: ngoteam@mb.osaka.infoweb.or.jp
口座番号：01180-6-68556　（郵便振替）

次回全体会のお知らせ

いよいよ96年も最後になってまいりました。みなさんいかがでしたでしょうか？じゃりみちも今年最後の号です。１年間お疲れさまでした!!　読んで下さった方も、ご苦労様でした。…なんて言っているうちにも来年へ向けての動きは続いております。次回の全体会の予定は、下記の通りですが、じゃりみちは少し発送日がずれるかも知れません。最初は1月の2日だし、その次はフォーラム直前の1月16日だし……。編集長の体力しだいです！なんてね。

１月８日（水）と１月２２日（水）18：30～
「仮設」ＮＧＯ事務局隣のプレハブ２階にて

全体会の報告

今回はなんとじゃりみちが出る前に２回もの会議が行われてしまいました。というのも、第４週がクリスマスにかかってしまうことや、内容的にしっかりやりたいという意見から、１週間早めて行ったからです。そこで、分かりやすいようにもう一つ前の事柄から簡単にまとめていきたいと思います。

その１（11月27日全体会）　キーワードは「情報」

フリーディスカッションをしてみて、いろんな疑問や不安や課題が出てきました。それらを解決して行くにはどうしたら？…そこから出てきたキーワードは「情報」。何かをするにも、してもらうにも、何が根本的な課題なのかを見つけるためにも、「情報」をきちんと整理し、突き詰めていくことで全体が見えてくるのではないでしょうか？

その２（12月11日全体会）　コミュニケーションの重要性

「情報」というキーワードを念頭において「仮設ＮＧＯはどうあるべき？」ということを話し合いました。具体的な話のきっかけとして「全国キャラバン」についての疑問や意見を出してもらったのですが、きちんと確認しないことからの情報の混乱や、ボタンのかけ違いが生じていることに気がつき、コミュニケーションの重要性が改めて確認されました。これは非常に当たり前のことなのです。しかし当たり前のことほど難しいということをとても痛感しました。

また、移送サービスのボランティアの「コーディネーター」という存在に、連絡会として支援しいくか？　という議論も少しふれ、次回に移送サービスボランティアとは？ということからの話し合いをファミリー神戸さんの司会で行うことになりました。

その３（12月18日全体会）　その中から何を見つけてくる？

「コーディネーター」に対するギャランティをどうするのかという話とは別に、「移送サービスは何故やるのか？そこから何が見えてくるのか？また、課題は？」といったテーマで話し合いをしました。まず司会のファミリー神戸さんの、ある非常に成功したアメリカの企業の話をして下さいました。それは、社長自らの足で一つ一つの店を回り、顔のつながりを大切にしながら情報を拾い、そして草の根的な課題をまた一つ一つ解決したことが成功につながったという話でした。…これはボランティア活動全てにそうと言えるのではないでしょうか？移送ボランティアと言っても、単純に人を運んだだけでは全てのことは始まりません。そこに何が課題としてあるのか、何がその人たちを追いつめているのかをきちんと把握し、行動にしなければ、この移送ボランティアの意味は半減してしまいます。

今後、公営住宅の移動が増えていきますが、既に公営住宅での孤独死の危険性が叫ばれています。それらにもこの移送ボランティアは何らかの糸口を見つけることができるのではないでしょうか。今回は、ファミリー神戸さんがコーディネーターとなって、わかちあい阪神さんとちびくろさんとを中心に行う移送サービスの事業を、連絡会のみんなでサポートしていこうということが承認されました。

忘年会する！

久しぶりのみんなで飲もう会。結構な数？の参加でいい感じに盛り上がりました。中でも、この連絡会の活動する土地の持ち主である、兵庫商会の社長さんの紹介では、握手を求める光景も。この社長は私たちの活動の根底を支えて下さっているのです。来年もこのメンバーがにこやかに集まれるといいですね。

未使用　てれふぉんかーど、く・だ・さ・い♡

＜仮設は今…＞

仮設住宅に住む人々の現在の生活状況について、私たち兵庫県被災者連絡会が日常的に取り組んでいる活動の一つである、「生活保護相談」を通して報告します。

96年７月下旬より、神戸市内全域及び西宮市などの一部地域に、生活保護相談の呼びかけビラを配布しました。そしてこれまで200世帯を越える相談を受け、必要に応じて当事者と一緒に福祉事務所へ行って生活保護の申請をする作業を続けています。申請件数だけでも12月18日現在で50件にも及び、生活保護が開始された世帯は40件、残りの世帯も順次開始されていく見込みです。さらにこれから申請しようとしている世帯も多くあります。このように多くの世帯が、最後の手段とも言える生活保護にすがりつく羽目になっています。しかし私たちの連絡会で受ける生活困窮者からの相談は、この度の地震による被災者で生活に困っている世帯全体からいけば、ほんの一部に過ぎないのでしょう。

最近受けた相談の一例を挙げます。神戸市の郊外にある仮設住宅で母（60歳）、娘（39歳）、息子（37歳）の親子３人で暮らす家族は、３人共日常生活には差し障りはないものの、軽度の障害があります。この家族は地震まで長田区で暮らしていました。母は月に６万円の障害者年金を受給し、娘と息子は地場産業であるケミカル工場で簡単な作業をして、わずかばかりの収入を得、なんとか３人で生計をたてていました。そこへあの大地震により、家も仕事もなくし、今の仮設住宅へ移ってきたのです。もと住んでいたところでは近所付き合いによる雇用関係があったのですが、今いるところではそういったものは当然ないうえ、長田区でも今は働き口はありません。そのことから姉弟が収入を得ることができず、生活が困窮したため、生活保護の申請をすることになりました。

生活保護の相談を受ける世帯の多くは、元々の地域の中ではそれなりに生活が成り立っていたとか、建築現場などで日雇いの仕事をして暮らしていたとかいう人たちです。その人たちの存在もあってこそ、今の社会が成り立っているのは当然のことなのですが、地震後、そういった人たちのところへしわ寄せがより多く来ているのが現実です。一般的にはこういった人たちの存在はあまり見えてこないのです。

これら以外にも様々な形で生活を維持するのが、どうしようもなく困難になってしまった例はいくつもあります。それほど、昨年の大地震からこれまでの間、立ち直るどころかますます深刻化している現実があるのです。誤解のないようにいえば、私たちは「生活がどうしようもなくなった人は、生活保護を受ければよい」などとは考えてはいません。私たちは生活保護の請負屋ではありませんし、生活保護受給者がこれ以上増え続けてよいはずもないのです。私たちが求めているものは、被災者の生活再建を可能にする援助の施策です。本来であれば、95年８月の災害救助法が適用されている間までに、きちんとしたものが行われるべきだったのです。そういったものが全くないに等しい中で、生活保護制度が、多くの生活困窮者が今の状態から立ち直るきっかけとか、元の状態に少しでも戻るきっかけとなるように運用をされているのであれば、一つの支援策として活用しようではないかということなのです。

いろいろなところからあがっている、再起のきっかけとなるものの必要性。それが大地震から700日が過ぎ、丸２年経とうとしている今、生活保護の相談を通してより鮮明に見えてきています。　この問題を抜きにして被災地に関わることはできないのではないでしょうか。

兵庫県被災者連絡会　中田　益宏

村井くんメキシコへ行く

来年に行われる市民とＮＧＯの「防災」国際フォーラムの関係でメキシコに行った村井くん。メキシコの方を招待する段取りだが、つながりはというとなんとあのイスタンブール（ハビタット2）で仲良くなっていたそうな。さすがですね。

約11年前にメキシコ大地震が起きたのですが、未だに仮設住宅が7～8箇所にあり、そして公園にテントもあります。それを見て一言。
「11年も経ってもまだ仮設住宅があり、更地がある。そう考えると神戸はまだまだである。これからが勝負。またボランティアも、気楽に、バランスよく活動していきたい。」

がれきのまちは今。

みなさんこんにちは。「まち・コミュニケーション事務局」の浅野と申します。みなさんは普段わりと「仮設住宅」のはなしは聞いても、あの２年前に、がれきが積みあがり焦土と化した被災地のまちと人がどうなっているのかは、あまりご存じ無いのではないでしょうか？私たちは長田区の菅原市場が有名になった御菅（みすが）地区でまちの手伝いをしているボランティアグループです。なのでちょっとここでは「まち」のはなしをさせていただきます。

かつて劫火に焼け尽くされ見渡す限りがれきが覆い重なり、120名の犠牲者を出したこのまちが今どうなっているか、と申しますと、まだ住民は２割程度しか戻ってきていません。表通りをぷらぷらと歩いていると、（プレハブやコンテナハウスが多いのですが）それなりに建物が建ち、正常に戻りつつあるように思われますが、かつて人々がふれあった路地の形見を通って一歩奥にはいると、そこは放置された基礎や雑草が広がっています。お店だっていくつか開店してるけど、周りに住民がいないんじゃ足を運んでもらえません。

せっかく息子ががんばって家を建ててまちに戻ってきたおばあちゃんも、長い避難生活で出始めた痴呆がさらに進行して、家族は面倒を見きれず入院させることになってしまいました。だってまちにはお友達が戻ってきていないし、子どもを産み育ててきた長屋と違って、更地にぽつんと建った家もおしゃれな今時の造りになってしまっています。

何でそうなんだろう？もう２年も経つのに・・・。ほんとに素朴な疑問がわくのではないでしょうか？

この地区では、およそ５～６割、つまり半数以上の人が古い長屋か文化アパートを借りて暮らしていた「借家人」です。しかし土地を持っている人でさえ、大きな借金を抱えて家を再建できるかどうか難しい選択を迫られているので、借家などはほとんど建たないし、公営住宅も市街地にはほんとにわずかしか建ちません。何となく事情が分かっていただけてきたでしょうか？

さらに、被害の特にひどかった地区には「区画整理」がかけられています。芦屋市・西宮市・神戸市の各区・淡路島・・・。「区画整理」は、道路と公園を整備するための国から費用のでる事業で、指定を受けた地区では今までよりも太い道路・大きな公園を作るよう指導され、土地を持っている人にはその一部を無償で提供することが義務づけられます。

確かに家が両側から倒れて路地を抜けられずに助からなかった人もいるわけだし、環境上も公園があった方がいいんだけど、路地を挟んで作られてきた下町の文化が道路の整備によって変わってしまうのではないかという不安と、住民がどれだけ戻ってこられるのか分からない現状、そして全焼しても４０万円の義援金の支給のみで再建も厳しい状況なのに、さらに土地の一部をとられるとなるとなかなか話は前に進みません。権利関係も複雑です。

本当はこの「区画整理」だって悪いことばかりではなくって、じっくりゆっくりと話し合いながら検討してゆければ、かえってみんなでよりよいまちを作ってゆくチャンスにもなるんですが、人がいません、余裕がありません。「もう来年になったら定年でローンもくめなくなる！」なんて声もあります。話し合いを進めるまちの役員さんだって、ボランティアです。おのおの遠くから集まってくる交通費だって馬鹿にならないけどみんな持ち出しです。生活が大変なのは同じなのに。

そんなこんなで今年も暮れようとしています。自然災害で財産や家族・友人を無くし、さらに法律や制度、行政の対応で地域の人間関係が対立せざるを得ないところに追い込まれている。そんなみなさんの３度目の１月17日は、それぞれにどんな思いをもたらすのでしょうか・・・。

仮設住宅の子どもの問題

西区室谷第２住宅ボランティア保健婦　大川　記代子

仮設住宅における子どもの状況

仮設住宅の中の、幼児や児童をもつ家庭はごく少数であって、高齢者でしめられる間に不規則にパラパラと散在している。小学生はおおむね転校がうまくできたと思われるが、小学生の１ケースの家庭内暴力と、中学生１名は転校以来不登校となり、子どもの震災のショックの大きさが私にも伝わってきた。子ども自身が一番苦しかっただろうし、また家族の心痛も大きかったろう。

仮設住宅に入って来た時、幼児を持つ母親たちは、子どもにどのようにして友達をつくってやったらいいか、どこで遊ばせようか、という不安が非常に大きかった。と同時に自分自身にも、悩みを語り合う親同志の横の繋がりが欲しいという痛切な願いがあった。また、仮設住宅の周辺には、公園や遊園地や遊び場、図書館など何も無く、保育園は20人待ちで、親たちの子育てにほしい環境の欠乏感は甚だ大きかった。家の前のじゃりみちやアスファルト道路の上で遊ばせているのが、日常の仮設住宅での光景となっている。

最大の苦労は、物音が筒抜けの家のつくり、極度の狭さである。子どもの独特の甲高い声、遊びやケンカの騒々しい音が直に隣近所に伝わってしまい、親たちは緊張でいつも身を縮ませている。静かでなければ耐えられなくなっている近隣のご老人にとっても、毎日のストレスは大変なものである。お互いにノイローゼに陥っていたり、しばしば緊張の糸がきれ、時として衝突が起きることもある。

幼児の親たちは広々としたふれあいセンターで遊ばせてやりたい、という強い願いがあった。しかし、もともとふれあいセンターは老人のための施設だと聞かされていた。そのため、私も母親たちも要望をし、今年の10月より幼児たちにも解放してもらえるようになった。

幼児ボランティアのサポート

10月中旬から第2と第4の月曜日の午後は、「神戸友の会」のボランティアが毎回３名ずつで、幼児の遊びを助けたり、母親たちの相談役にあたることを引き受けてくださることになった。主なサポートは、動きの激しい子どもたちを見守り、一緒に遊んだり、絵本を読んだり、だっこ、昼寝の手伝いなどの手助けである。15時にはお母さんと一緒になって、子どもたちのために手作りのおやつを作り、みんなで一緒に楽しく食べる。調理器具は鍋一つしかないが、ゼリー、ミルク餅、さつまいも入り蒸しパンなど、毎回メニューが変わる。家庭でも作ってみたいという親も出てきていてる。次回は、集めた牛乳パックを利用して、子どもの椅子を製作しようという計画である。

評価と課題

「あおぞらじどうかん」の主として学童に対するボランティア活動は、ふれあいセンターで月2回の土曜日に息長く活動が続けられており、大変貴重である。これに加えて、ふれあいセンターでの幼児と母親への「友の会」のボランティア活動は、子育てや食べ物に関する、この会の長年の研究の実績が遺憾なく発揮され、お母さん方に喜ばれている。

仮設住宅の中で成長する子どもを行政も市民もガチッと見つめ、支えているかといえば、高齢者ケアの課題の影に「放り置かれている」と言わざるを得ない。特に幼児にとっては、一日、一週間、一ヶ月は常に成長に関わっている時間の連続である。他の世代とは全く異なる意味合いを持つ。それだけに子どもに対しての細かなサポートや環境づくり（関係づくり）は社会の責任として可能な限り果たしていかなければならない。仮設住宅に最後まで残る子どもをもつ家族に対してもこのことは忘れてはならない。

ふきちゃんのキャラバン日記

プロジェクト結ふ　石井布紀子

3回目の1月17日をどう迎えようかな？　その5

いよいよフォーラム当日まで１ヶ月となりました。何万人かの人々にお集まり頂くイベントの計画がずいぶん具体的になりはじめており、たくさんの”？”への答えが生まれはじめています。「10のテーマでシンポジウムを行い、そこから100の復興計画案をまとめるってことだけど、どんな風にまとめていこうか？」という話し合いでは、当日のパネラーの方の選定だけでなく、たとえば「オープニングフォーラム、被災者の現状をテーマ別に寸劇に表してみよう」とか、「結びのフォーラムでは、出来上がった復興計画案をわかりやすく表現するために、10色の”立体オブジェ”を作ってみようよ」など、広く皆さんにわかりやすくお伝えする方法についても、検討準備中。また、「被災者の方々の手作り品や、全国から駆けつけて下さるトラック野郎の方々のお見送り方法は？」と言った風に、どんどん企画案が具体的になっており、私も今から当日が楽しみになっています。西宮市内の仮設住宅では、「５ヶ所のふれあいセンターを使っての文化祭的イベントをみんなの手で作ってみようか」という話が進んでいるだけでなく、「19日には、メイン会場であるポートアイランドまで出かけてみよう！バスツアーを活用して。」という話し合いも進んでいるため、仕掛人の一人である私は、内心どきどきしていて、「何とかこのイベントが、被災地の３年目のスタートとして、幸先のいいものになって欲しいな」と祈るような気持ちを持っています。

さて、先日この『じゃりみち』を読んで下さった方からご意見を頂きました。「防災フォーラムや年越しにむけて、ボランティアさんを募集中だと書いてあったけど、具体的にどんなことをするのかが知りたい。『宿泊先は大丈夫？短い時間でもいいのかな？今ごろになって初めて参加するボランティアでもいいの？』とかいろいろ思っていても、なかなか聞けない人が多いんじゃない？」というような内容でした。嬉しい問い合わせに私は思わず声がはずみました。

「そうだよね。もっと具体的にお願いした方がいいよね。私は、好きな時間に好きなだけ参加してもらって大丈夫だと思うねん。特に仕事の内容を選ばなければ。例えば、仮設訪問を丁寧にやりたいのに30分しか時間がないと、思ったような結果を持って帰って頂けるのかどうかわからないかというように、希望があればあるほど時間の調整が難しくなるかも知れないんよ。だから、こだわらなければ、いろんな仕事があるねん。事務仕事でもさあ、ワープロ入力からお手紙その他の発送の手伝いなんかは、それこそフォーラムでも猫の手も借りたいくらいやろうから、30分でもええから来てほしいんよ。事前に連絡を頂いて、いつ来て下さるのかさえわかっていれば、準備しておけるやん。当日をよりよいものにするための準備は、もう今からしないと間に合わないから、事務所ではもう連日ワイワイガヤガヤやっているんだって。他にも、年末年始に、バスツアーに参加して下さる方のお宅への訪問だってできるにこしたことはないし、ついでに寝たきりの方のおうちに寄って頂いたりしたら喜んで下さるかも知れない。

西宮市でもね、この年末・年始はおそうじのお手伝いやら年越しそばの炊き出しやらを、フォーラムの準備の一つとしてやってみれたらいいねって話し合っているんだよ。手伝ってもらえたら無茶苦茶嬉しい。ふれあいセンターでのお茶会などに来て下さったボランティアさんから、よく「こんなに楽しいって思わなかった」などの感想を頂くことは少なくないしね。ボランティア活動って、そんなに改まってやることじゃなくてもいいみたいだよ。

フォーラム当日なら、バザーやフリーマーケットの手伝いもあれば、炊き出しもあって、会場警備や機材の運搬手伝いなんかもある。シンポジウムの方では記録や受付の手伝いかな。お客さんとして参加するよりは、一緒に作る喜びを味わってみたいと思ってもらえれば嬉しいかな」と会話の中でいろいろと説明させてもらいました。・・・これくらいかな？みんな是非是非来て下さいね!?

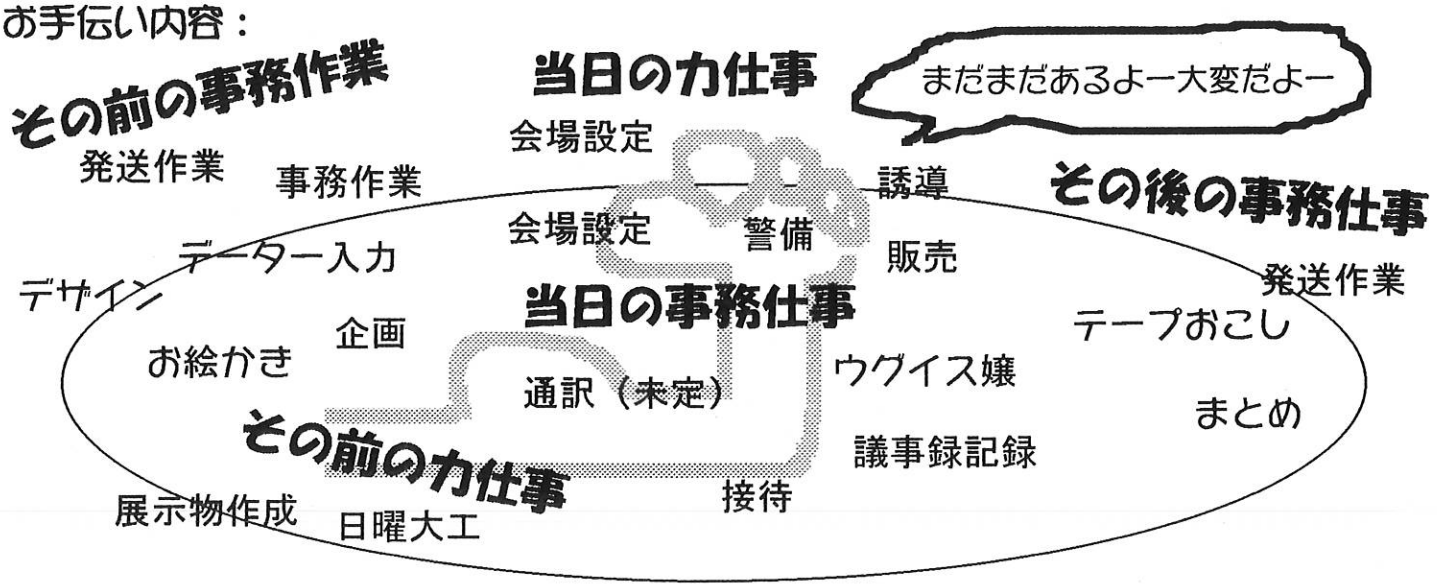
ボランティア募集!!!

市民とNGOの「防災」国際フォーラム

宿泊OK！

昼食補助・JR三宮駅～市民広場駅（ポートライナー）往復特記念別乗車券

お手伝い内容：



問い合わせ：市民とNGOの「防災」国際フォーラム事務局
TEL：078-578-6921　FAX：078-578-6923　細川まで

情報コーナー

要りませんか？

中華スープ・ミロのジュース
コタツ・電球のかさ・掃除機
問い合わせ：事務局
078-578-6922

引越の時にどうぞ

毛糸（新品・お古様々）
問い合わせ：poco a poco 神生まで
030-829-2839

募集

灘南ふれあい教室に参加しませんか？

灘南ふれあい教室は被災地に住む子どもたちに学習面のサポートをするボランティア団体です。勉強を楽しく気楽に長くできるように指導していきたいと考えています。塾ではありませんので気楽にご参加下さい。

対象：小・中・高校生
実施日：小学生の部···毎週（土）か（日）16:00～17:30
　　中・高生の部···毎週（木）19:00～21:00
指導科目：全科目と珠算
運営費：毎月500円（印刷代、おやつ代等）
先生：教師・大学生・塾の先生・資格を持っている方
問い合わせ先：ボランティアグループ・シティライト
灘南ふれあい教室代表責任者　竹村務　078-881-0191（自宅）
教室078-881-8539　または千歳歓　030-49-00715まで。

じゃりみち 2 出来上がりました!! 17号から29号まで収録したじゃりみちの縮刷版第2弾です。写真をたくさん使ったので、見やすいですよ！1冊500円。　事務局 山田まで。

今年も1年間本当にお世話になりました。

よいお年を！